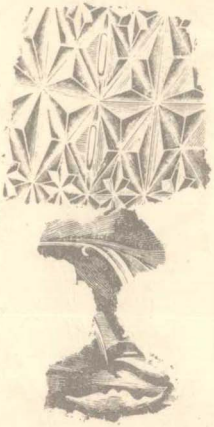
芹澤光治良作品集

第十五卷



人間の運命 6

戦野にたつ
暗い日々

芹澤光治良

新潮社版

人間の運命　6
戦野にたつ・暗い日々　〈芹澤光治良作品集15〉

昭和50年4月10日　印刷
昭和50年4月15日　発行

定価850円

著者　芹澤光治良
発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町71
電話　業務部 (03) 266-5111
編集部 (03) 266-5411
郵便番号162　振替東京4-808

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　新宿加藤製本株式会社

© Kojiro Serizawa 1975 Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

戦野にたつ
暗い日々

装画 司 修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

芹澤光治良作品集　第15巻

戦野にたつ　〈人間の運命〉第十一巻

第一章

ふと目を開けると、列車の窓に海がよせていた。晴れわたった空にさからうような紺青の海だ。水平線から次々に白い波頭をたててよせている。

森次郎はいそいで窓を手巾で拭った。

目の下で、老いた漁師が二人、ひろげた網のそばにしゃがんでいた。黒い砂浜に赤い大きなもうせんが何枚も敷かれて、手拭をかぶった婦が数人、ふちにたたずんでいる。鷗が白く砕ける波頭をかすめて、赤いもうせんの方へ翔んだ。赤いもうせんと思ったのは、桜蝦をほしてあったのだが、すぐに伊豆の山脈が見え出して、松原が窓にとびこんだ——

そのとたん、次郎は胸の底から湧きあふれるような感動で、身ぶるいした。

東海道線の上り下りに、幾度も車窓から眺めた故郷の風景で、奇とするに足りないが、この魂のなかから吹きあがった風のような同じ感動を、いつか体験したことがあるが、いつ、何処であったか——次郎は目を閉じて、感動に自己を委せながら、じっくり考えた。

あれはスイスのレーザンの高原療養所にいた時のことである。今も鮮やかに覚えている。

そうだ、午前の処方箋の散歩からもどると、フーベル君の手紙が届いていたっけ。ソルボンヌ大学の研究室の同僚で、ディジョン大学の助教授である彼が、春の休暇にレーザンに見舞に来たいが……という親切な申し出であった。しかし、社会科学をすてる決意をしたことでもあり、自分はフーベル君にも死んだものとして忘れられたかった。それ故、ホテルの郵便箱の開くのが二時であることを思って、すぐ仰臥室で返事を書いたが、彼の感情を害さないように巧みにことわるのに、文章に骨を折り、昼食の合図の鐘が鳴りひびいても、書きおわらなかった。肩をこらしてようやくおわって、服にブラシをかけながら、三階の仰臥室から外を見たものだった。毎日見なれた景色であったが、あの時の新緑にもえる高原と、澄んだ空の色彩は、今も眼底にしみついているほど、自分をとらえた。とうに食堂がひらいているのも忘れて、茫然と眺めていたっけ……高原に雪が消えたのは、その数日前であったが、一筆で緑にぬりかえられたのを、初めて気がついたように眺めていたものだ。療養所前の広い傾斜面の原には、緑の牧草に桜草が咲きほこっていた。並木路の向うの牧場には、くびに鈴をつけた牛の群れがのどかに鈴の音をひびかせていた。自分

も声を出したくなって、両手を高くあげて深呼吸した。それから、フーベル君宛の返事をポケットに入れて、一階の食堂へおりて行った。エレベーターをおりて食堂にはいろうとして、その刹那、食堂の異様な光景に、思わず立ち竦んだっけ……

日光をおそれて、陽おおいや鎧戸をおろした暗い大食堂に、もれる日光が、ところどころにおいた奇怪な植木の葉におどって、あでやかな服装の男女を仄かにうかびあがらせていたが、その紅毛碧眼の男女がなにか不吉な死の宣告を待つような様子のすさまじさ。一種の餓鬼図の前に立ったようだった。自分はあっと叫びそうになるのを耐えたが、一斉に向けられたものうい視線に吸いつけられるようにして、食堂へはいった。その時食堂に集まっていた百人ばかりの患者は、みな挨拶をかわす人々であるのに、その瞬間はまるで見知らない敵のように、その人々の待っている何かを、自分が妨げたような圧迫を感じたものだ……自分はいつもの席について、不可思議な感動をしずめたが、なんのことはない、食卓ではいつもの親しい大学生の患者諸君が、料理の皿のはこばれるのを待ちあぐんでいたのに過ぎなかった。暗い食堂内の異様な植物は見なれた橄欖樹やゴムの鉢植えであった。死の宣告を待つように見えた人々も、食欲がなくてむりにフォークを動かしていた……すべて、毎日見なれた光景であるのに、あの時、どうして、立ちすくむような感動が吹きあげたのであろうか……

むかし有名な高僧は小石につまずいた拍子にさとりをひらいたと言うが、あの瞬間は自分にとっても、さとりをひらくような偉大な契機にならなかったにしろ、一生の間にそう幾度も経験できない素晴らしい瞬間だったろう。というのは、その瞬間に、病人である自分から、健康な自分が分離したようであったから。魔の高原に捕われた自分から、正常な自分が生れたようであったから。その食事中、自分は病状の如何を問わずに、この高原を下らなければならない時になったと、真剣に考えて、運ばれた料理も忘れたほどだから……。食堂を出ると、フーベル君宛の手紙を破りすてて（彼をさけることもなくなったので）、すぐ主治医に特別診察を申し込み、パリへ帰る許可をもとめた。そのおかげで、あの年の春に高原をおりることも、秋に日本へ帰ることも、できたのだったが……

次郎は目をあけ、魂の底から吹きあげた風のような今の感動が、なんであるか、改めておもった。

節子の母の死からようやく解放されて帰京するところだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五十日も前、葬儀をすませて、次郎一家が東京へ引き揚げようとした時、有田氏は、死者の霊がわが家の屋根の上に四十九日間はとどまるので、その間、死者に縁の深い者が家をまもらなければ成仏できないと、言い伝えられているから、次郎達に滞在してもらいたいと言って、引きとめた。その有田氏の言葉を、次郎は有田氏の感傷か、我儘と解した。有田氏は夫人が死亡してから葬儀の終るまで、ずっと大津町の本邸にいて、目を赤くして、弔問客には言うまでもなく、次郎にまで、故人がどれほどいい伴侶であったか、突然死なれて途方にくれたと、狼狽と悲嘆をかきくどくようにして、師団長閣下や県知事等から贈られた弔花を故人に見せたいと、涙をこぼした。生前の夫人に対する仕打ちを知る者には、それが一種の演技でなければ、激しい悔恨の涙であろうと、想像された。それ故、四十九日間死者の霊が屋上にとどまるからとて、むりに引きとめることが、次郎には理解できなかった。有田氏自身、本邸にいればいいことだから。

「わしはこの家にいては、休まらんし、体がもたないんだよ。家内に先立たれたのだから、わしが頑張って長生きせんと、成夫が困るからなあ。彼奴が凱旋して、嫁を迎えて、この家をゆずるまでは、君達も助けてくれなければ困るよ……それがお母さんの望みだろうと思うからなあ」

有田氏はこうも言った。

「わしは、こんなこともあろうと慮って、君達に名古屋に落着いてもらいたかったが……今更愚痴を言ってもはじまらない。ただ、玄関の人々も（有田氏が弁護士をしていた頃から、玄関の方に法律事務所を持っていたが、今日なお二人の弁護士と一人の事務員が通勤していた）家をまもってくれるだろうし、喪中で、成夫の凱旋までは、有田家は開店休業だから、冬子とすみ子二人で、留守番ができなくもないが……四十九日間血のつながる者が家を護ることで、家内が成仏できるそうだからな。だが……節子は孫の学校のこともあって、東京を留守にはできない。特に、家内は孫思いだったから、節子が孫からはなれて名古屋にとどまっていては、気をもんで成仏できんだろう……そこへいくと、君は勤めはなし、何処にいても、ペンと紙があれば仕事もできるし、この家もすぐ静かになるから勉強できる。書物は東京から送らせればいい。頼んだよ」

簡単にそうきめて、有田氏はその翌日には、節子と子供等を名古屋駅へ自動車で送り、その足で新舞子の別邸へ行ってしまった。我儘な有田氏だ。日本軍が南京を占領して、これで、国民政府も抗戦を断念し、支那事変もおわるものと、一般に信じられたから、四十九日の法事の前に、成夫が帰還するであろうと、考えているようでもあった。

次郎はヨーロッパから帰朝して間もなく滞在した時のように、内庭に面した二階の南側の縁側に、籐製の寝椅子をはこびあげ、そこを仰臥療養室にして、留守番をするよりなかった。義母のお通夜の折に、妾のおすずが女中達に向って、これからここの奥さんは自分だからと宣言したとかで、女中達を憤慨させたことを知っているだけに、おすずの娘の冬子とすみ子が、女学校も卒えて、主婦代りに一家を切りもりしようとしている前で、邪魔者の役目をふりあてられたようで、ばかばかしいことであったが、超然としていることにした。

その六週間ばかりの滞在中に、次郎は名古屋の歴史や地理を知ろうと心がけて、処方箋の安静時間の他は、できるだけ家におらずに、市内を歩き廻り、郊外にも足をのばしたが、また、異国で結核に倒れて死と闘った日のことを、失われた時を索めるように、毎日三枚以上書くことを自分に課して、有田家の俗事にかかわらないように努めた。

しかし、毎日のように、義母に関係のあった人々の訪問で妨げられた。有田家に書生をした人、奉公をした女、義母に助けられた人、世話になった人――みな、お通夜にも葬儀にも参ったが、仏が四十九日間家にとどまるからとて、仏壇の前で供養の焼香をし、それから、主人役の次郎に、仏とどんな関係であったか、くどくど話すのだった。それによって、次郎は節子の母をよく識ることができたが、底ぬけの善人で、書生や女中の面倒をよくみて、その独立後も、結婚してからも、ずっと目をかけて、経済的援助もしていたようだ。有田氏の関係する会社の社員や労働者の家庭に、病人や不幸があれば、必ず見舞って、援助の手をさしのべた。それ故、有田氏の行為に批判的な者も、会社に不平のある者も、夫人には心服していたらしく、節子の母が夫から虐げられて気の毒な一生を送ったと、涙をためて次郎にうったえるように、有田氏の女道楽を具体的に、聞いていて切なくなるほど語る者があった。その一つでも結婚前に耳にはいったらば、節子との結婚をためらったろうと思われることばかりで、語る方は仏の徳をたたえるつもりであろうが、仏前で聞く次郎には、つらかった。ただ、嫉妬やわが不幸をたえるために、他人のために尽して、底ぬけの善人に見えたのであろうと、故人をあわれに思ったが……

仏前には、兵隊の手紙がたくさん供えてあった。毎日届く兵隊の手紙を、そのまま供えてから、次々に書生が目をとおして、故人がしていたように返事を書いていた。次郎は義母が死亡したと、返事を書くように書生に話したが、書生は兵隊の悲しみを思うと、知らせたくないと答えて、それまで届いた兵隊の手紙と写真とを持ち出して見せた。

手紙は小さい柳行李にいっぱいあった。写真は大型の写真帖にぴったりはりつめて、一人々々部隊名と姓名とを書き加えてあった。義母は兵隊から手紙が届くと、その写真帖のなかに、差出人をさがして、その写真の前で手紙を読んで返事を書いたと、いうことだった。兵隊はみなあどけないほど若くて、髯面の者、防寒服をものものしく着た者、真面目くさった顔の者、軍刀に手をおいた者、酒保の前で微笑した者——肩の星も二つか三つの者ばかりで、金筋らしい肩章の者は、まれであった。書生の話では、その写真の幾人かは、名古屋の陸軍病院に入院中に、有田邸をわが家のようにして、幾度も来ては遊んで行ったことがあるとか。

書生のすすめで、供養のつもりで手紙を読んでみたが、五通のうち三通ぐらいは、慰問袋のお礼であるが、一通は必ず、義母をお母さんと呼んで、素朴に甘えかかり、頼みごとをして、愛情をこめたもので、次郎でさえ胸をうたれた。しかし、他人をお母さんと呼んで、心を寄せるほどの愛情の切なさは、どうしてうまれるのか、次郎は興味をひかれた。行李いっぱいの手紙も整理して、一人々々日付順にそろえてあったから、その一つを、例えば野木正夫という上等兵の手紙の束を、日付順に読んでみると、その上等兵の人となりも、義母との交渉も、次第にわかった。未知の青年が出征するのを、偶然に駅頭で見送り、それが機縁になって、手紙を往復し、慰問品など送っているうちに、義母はその青年が、出征しているわが独り息子と同じ運命にあることも手伝って、その青年の武運長久を祈る心が、次第に母性愛にたかまったようであるが、その経過が青年の手紙に、よく感じ取れた。しかし、この母性愛も、実は義母が夫の愛を失い、家庭的に不幸であったからではなかろうかと、次郎はふと疑ったが、同時にまた、頑強な兵隊が何故こんな切ない手紙を書くのかと、いぶかった。

兵隊の手紙はみな、遠く満州の北のはてから、蒙古、北支那、中支那の各地ばかりでなく、思いがけない島からも来ていたから、狭い日本しか知らなかった素朴な兵隊が、初めて異国にわたり、異邦人のなかで、戦闘にあけくれしているために、望郷の思いで、お母さんと絶叫するようにしてすがりたくなるものとしか、考えられない。こんな手紙を読んだから、義母は出征兵の見送りのために、北風に吹きさらされて幾夜も駅頭ですごして、死をはやめて、名誉の戦死に等しいと、名古屋師団長から弔辞をもらったのだと、次郎はやはり支那事変の不幸を想うのだった。そして、義母が兵隊に約束したことは、すべて実行するように、書生に頼んだが、実際、兵隊は常識外れの頼みまでしたようだった——

或る朝――信州から出て来たが、奥様の御仏前にお詣りさせて下さいと言って、黄色いへこ帯をした田舎娘が玄関に現われた。書生が応対に出たが、ご主人でなければ、何処の誰かも話せないと答えるばかりだからとて、次郎を呼びに来た。次郎は少女を仏間にとおして、新しくもうけた仏壇の前に坐らせた。少女はもじもじためらったが、手提袋から不祝儀袋を出して、仏前に供えて合掌してから、ふところの財布を出して、小さい新聞切抜を次郎の前におき、「あの、これを見た時、すぐ来たかったけれど、学校を休めなかったから――」と、話し出した。

恐らく夜行列車のなかでも、こう話そうと、繰返しつづけたのであろう、すらすら朗読するように話した。新聞に有田夫人の死亡の記事を発見して悲しかったこと。少女の兄の一等兵が満州に出征中に病気して名古屋の陸軍病院に入院中に、夫人が見舞ったことが縁で、休日など有田邸で過すようになったこと。その年の七月、兄が再び北支に出征する時に、夫人に頼んで、少女が高等小学校を卒業したらば、有田邸から女学校へ通学させる約束をしてもらったこと。その後、そのことで夫人から二回手紙をもらったこと――等を話して、手提袋から二通の封書を次郎の前において、つづけた。

「この三月高等を卒業しますから、すぐ名古屋に出たら、こちらから女学校へやっていただけますでしょうか」

二通の手紙は確かに故人の手蹟であり、文章も故人のものである。一通には、一等兵の兄が妹を女学校へ入学させたい希望はわかるが、本人の意思はどうであるか、女中の手伝いをする覚悟があるかどうかと、問いかけている。他の手紙には、県立と私立の女学校に相談した模様をくわしく述べて、私立女学校の方では、二年編入試験を受験させるというから、その準備をするようにと、こまごま注意をしてある。算術と国語と英語の試験があるが、その女学校の一年生の教科書から出題するというから、教科書を一まとめに送ると書いて、「校長先生は、高等二年を卒業して、二年編入試験に及第しないようであったら、女学校に入学する値打ちがないと、言っておりましたよ」と、加えてある。

七月以降のことであるから、故人はすでに病気で弱っていた筈なのに、この少女のために、女学校の校長をわざわざ訪問したのであろう。次郎は故人の善人ぶりを改めて思った。

「それで、編入試験に及第する自信がありますか」

「はい。算術と国語はやさしいし、英語は高等でやらないけれど、毎日学校に居残りして、高等の先生に習いましたから！」

「あなたの村は上田市から近いようだから、土地の女学校では困りますか。学費は送金するようにしますから、安心して下さい……母が亡くなって、当分は若い妹が主婦代りに留守番をするので、ここであなたをお世話することは、むりのようですよ」

そう次郎が話しかけると、瞬間少女はべそをかいたが、すぐにきりっとした表情をして、彼女の農村が上田市から三里ばかりあって、通学が困難な上に、貧乏な彼女が女学生姿で通学すれば、村人の噂にのぼって、家の税金をあげられるから、不可能だと話して——有田さんに会わせて下さい、直接お頼みしますからと、必死に次郎を睨むような目で見上げた。同じ信州出身のプロレタリア作家、平森たき子女史も、少女の頃には、この娘のようにひたむきな目をしていたのだろうと、次郎はふと思って微笑ましくなり、有田氏の会社に電話をかけてみた。有田氏は家内の生前の約束ならば、実行すればいいと、簡単な答えであった。

——三月からは冬子ちゃんが主婦代りの留守番なのに、その少女の世話までさせていいですか。

——やむを得ん。そのうちに成夫が帰還して、嫁を迎えるから、いいさ。

——お父さんから、あとで、冬子ちゃんに話してやって下さい。

そう念を押したが、その土屋かず子という少女は、有田氏の返事を聞くと、飛び立つようにして、私立女学校へまわって入学手続をすませてから信州へ帰る、と言いのこして、昼食に引きとめたが、聞きいれないで、いそいそもどって行った。次郎は中学校へ入学を切望した少年の日を、この少女のなかに見る思いで、学校嫌いの節子の異母弟妹たちと、自然に較べたが……

とにかく、義母のところへ届く兵隊の心をこめた手紙に、いちいち満足な返事を送るだけでも、容易ではなかった。それに加えて、義母のいない有田家は、ただ広いだけで暗く、笑いも、団欒もなく、陰気で、やりきれなかった。食事もいつも独りで、節子の弟妹が数人同居するので、せめて夕食ぐらい食卓をともにするように申し出ても、相変らず別々で、時たますみ子が見かねて給仕に坐るが、話しかけても、ええとか、いいえとか、答えるきりで、姉の冬子にいたっては、義弟達とともに、明らかに次郎を敬遠していた。廊下などで行きあって、声をかけても、顔をそむけた（肺病と聞いただけで恐怖しているとは、次郎は気がつかなかったが）。おすずが二、三日おきに必ず岐阜の別宅から出て来ているようだが、次郎を避けるらしく、幾度も忍ぶような足音を耳にしたり、いそいで階段を降りる後姿やかくれるように座敷にはいる姿を見受けた。死者の霊が

屋根にとどまるどころか、生霊が家中をさまようようで、次郎は自分が滞在することで、生霊が現われるのだと、不利な役廻りを自嘲したかった。有田氏はまた、時々午後に、風が吹きこむように、ひょっくり本邸に現われて、家中騒ぎたて、冬子やすみ子の笑い声も聞えるが、金庫のなかに用があるので、二十分もとどまらないで、去ってしまう——次郎は早く四十九日の法事がすめばいいがと、吐息する日が多かった。

ようやく四十九日の法事を迎えた。節子は子供が発熱して、東京をはなれられなかったが、それを却って次郎は喜んだ。節子は母のないわが家が、幽霊屋敷に化したことを、悲しむにきまっていたから。法要も、そのあとの精進落しも、正午から有田家の菩提寺で行なって、客人はみな菩提寺で解散した。これで次郎も解放されて、すぐ帰京できるのを喜んだ。

しかし、節子の異母妹の光子夫婦が、神戸から出て来て、前夜は岐阜の別邸ですごし、おすずに伴われて菩提寺に来て、帰りに本邸に寄ることになった。満州にいる姉の照子夫婦から依頼があって、有田氏にゆっくり話したいことがあると言った。それ故、有田氏も本邸へもどることにしたが、おたつが盛装のまま有田氏について本邸へ来た。

おたつは新舞子にかこわれてからも、あくまで女中だという建前を夫人がとったからか、一度も本邸に顔を出したことがなく、夫人の葬式の時も、一般会葬者のなかにまぎれるようにして焼香していたくらいだ。それが、有田氏のあとにしたがって、堂々と正門からはいり、正面玄関に履物をそろえて、上るのを見て、奉公人はじめ手伝いの者は目をみはった。光子の夫の林田はおすずや光子、冬子、すみ子を促すようにして、正面玄関から上った。夫人の生前にはもちろん、その日まで、正面玄関からはいるのは、有田氏と正式の客に限られていて、家人は横の玄関から出入りする習慣であった。次郎は面倒なことになったと思いながら、家族用玄関から上り、静かに女達の態度に注意を向けた。一同奥の書院にとおったが、部屋におかれた二つの火鉢を中心にして、男と女とわかれわかれに坐ることになった。おたつは有田氏につきまとうようにして外套を脱がせ、有田氏だけにお茶をはこび、こまごま心をつかって、有田氏の背後に控えた。

次郎は、林田がいつ切り出すか、固唾を呑む思いであった。というのは、菩提寺で法要のはじまる前に、話したいことがあると、林田に廊下へ誘い出されて、満州の土居夫婦からも頼まれたからと、内証話のように、声を落して話された。

「これは、森さんよりも、東京のお義姉さんの意見をきき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com